

# 狩口台遺跡発掘調査報告書

1990

神戸市教育委員会

## 序

神戸市の西端に位置する狩口台は、眼下に明石海峡から淡路島、遠くには家島群島、小豆島、紀淡海峡を一望にすることができます。建設の始まった明石海峡大橋が完成しますと、景色にもまた新たな彩りを加えることとなるでしょう。

狩口台の地には、古くから親しまれた「きつね塚」があり、近年の調査で古墳であることが確認されました。その際、弥生時代の遺物も発見され周辺に弥生時代の遺跡の存在が予想されていました。

今回、狭い面積ではありましたが古墳の北側を中心に調査を行い、弥生時代の竪穴住居などが発見され、集落址の存在が明らかとなりました。

今回の発掘調査で明らかになりましたその成果を、ここに報告書としてまとめることができました。広く市民の皆様にご活用いただければ、幸いに存じます。

発掘調査および本書の刊行にあたり多くの方々のご協力を得ました。最後になりましたが、厚くお礼申し上げます。

平成2年3月31日

神戸市教育長 福尾 重信



## 例　　言

1. 本書は、狩口台遺跡発掘調査の報告書である。
2. 当遺跡は、神戸市垂水区狩口台6・7丁目に所在する。
3. 発掘調査は住宅街区整備事業に伴うもので、神戸市スポーツ教育公社が、神戸市教育委員会の委託を受けて、1989年3月22日から同年4月13日までと、1989年8月8日から同年10月2日までの間に実施したものである。発掘調査総面積は1185m<sup>2</sup>である。
4. 発掘調査組織（昭和63年度）

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会）

宮本良二郎　奈良国立文化財研究所  
榎上　重光　神戸市立博物館副館長

教育委員会事務局

教育長　　緒方　学  
社会教育部長　岡村二郎  
文化財課長　西川知佑  
埋蔵文化財係長　奥田哲通  
文化財課主査　中村善則  
事務担当学芸員　渡辺伸行、西岡巧次  
調査担当学芸員　松林宏典

スポーツ教育公社

理事長　　宮岡寿雄  
副理事長　緒方　学  
専務理事　垂井圭司  
専務理事　畠岡瑞夫  
常務理事　白石仁志  
総務部長　藤井　浩  
調査役　　田中　進  
総務課長　静観圭一  
文化財調査係長　中村善則  
(文化財課主査兼務)  
事務担当　　高井きつき  
調査担当学芸員　菅本宏明

発掘調査組織（平成元年度）

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会）

宮本良二郎　奈良国立文化財研究所  
榎上　重光　神戸市立博物館副館長  
和田　晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長　　緒方　学  
社会教育部長　岡村二郎  
文化財課長　西川知佑  
埋蔵文化財係長　奥田哲通  
文化財課主査　中村善則、渡辺伸行  
事務担当学芸員　西岡巧次  
調査担当学芸員　松林宏典

スポーツ教育公社

理事長　　宮岡寿雄  
副理事長　緒方　学  
専務理事　垂井圭司  
専務理事　畠岡瑞夫  
常務理事　白石仁志  
総務部長　藤井　浩  
調査役　　田中　進  
総務課長　静観圭一  
文化財調査係長　中村善則  
(文化財課主査兼務)  
事務担当　　鷲尾稔一  
調査担当学芸員　菅本宏明、谷　正俊  
〃　　浅谷誠吾

5. 遺構実測は菅本、谷、松林、浅谷、古屋浩、遺物実測は菅本、松林、浅谷、原稿執筆は、谷、松林、浅谷が担当した。

6. 調査参加者

補助員　古屋　浩

整理員　青木和美、内垣真澄、西馬久美子、西良さち子

## 目 次

### 序

### 例言

第1章 はじめに.....	1
1. はじめに.....	1
2. 周辺の弥生遺跡.....	3
第2章 調査の概要.....	5
第3章まとめ.....	20

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図.....	1	第10図 S B 0 5 平・断面図.....	11
第2図 1979年度調査出土遺物実測図.....	2	第11図 S B 0 6 平・断面図.....	12
第3図 周辺の主要弥生遺跡分布図.....	3	第12図 S K 0 2 平・立面図.....	13
第4図 第2地区調査風景.....	4	第13図 土坑平・立面図.....	15
第5図 第1地区遺構平面図.....	5	第14図 S D 0 1 平・立面図.....	16
第6図 S B 0 1 平・断面図.....	6	第15図 石鎧実測図.....	17
第7図 第2地区遺構平面図.....	7~8	第16図 第2地区ときつね塚古墳.....	17
第8図 S B 0 2・0 3 平・断面図.....	9	第17図 出土土器実測図.....	18
第9図 S B 0 4 平・断面図.....	10	第18図 出土土器実測図.....	19

## 図 版 目 次

図版1 第2地区全景	図版4 1 S B 0 6
図版2 1 S B 0 1	2 S D 0 1
2 S B 0 2・0 3	図版5 1 S K 0 2
図版3 1 S B 0 4	2 S K 1 1
2 S B 0 5	

# 第1章 はじめに

## 1. はじめに

### 位 置

狩口台遺跡は神戸市の西端、垂水区狩口台6・7丁目に位置する。狩口川と山田川に挟まれた標高40m前後の丘陵上に立地し、遺跡からは、眼下に明石海峡から淡路島、南に紀淡海峡、西に家島群島・小豆島から四国まで望むことができる。

### 調査の経過

今回の調査は、住宅街区整備に伴う道路拡幅部分について、市営住宅解体に伴う試掘調査の結果に基づき発掘調査を行うものである。調査は1989年3月22日から4月13日までと、1989年8月8日から10月2日までの2回にわたって合計3地点において行った。

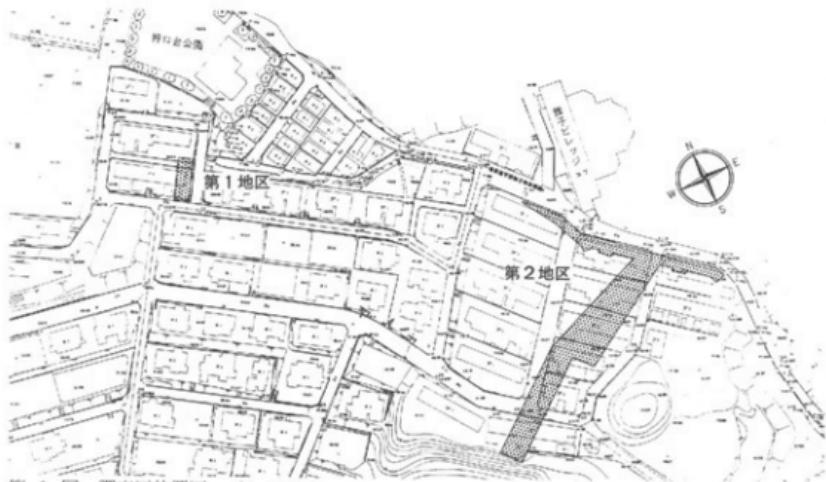
それぞれの地区名は第1図に示したとおりで、以下、本報告ではそれぞれ第1地区、第2地区と呼ぶこととする。

なお、第1地区と第2地区東西トレントは3月から4月に、第2地区南北トレントは8月から10月に調査を実施したものである。

### これまでの調査

狩口台遺跡は過去に何度か調査が行われている。以下、それぞれについて簡単にまとめておく。

最初に調査が行われたのは、1979年、狩口台6・7丁目の市営住宅に新たに住宅を建設する計画が神戸市住宅局から出されたことに伴うものであ



第1図 調査区位置図 (1:2000)

る。分布調査の結果により、かつて縄文時代の石器が採取された付近（第1地点）と古墳状隆起（第2・3地点）の3ヶ所について試掘調査が行われた。第1・2地点では遺跡の存在が確認されなかった。第3地点については、直径25m、高さ4mの二段築成の円墳で、二重の周濠が巡っていることが確認された（きつね塚古墳<sup>(1)</sup>）。主体部は南西に開口する両袖式の横穴式石室で、羨道幅1.4m、羨道長4m、玄室幅2.2m、玄室推定長4mを測る。玄室内からは須恵器壺・甕・長頸壺・环身・环蓋などが出土しているほか、墳丘上からは破碎された須恵器大甕が出土している。出土遺物から6世紀中葉頃の焼造と考えられる。なお、墳丘盛土内より縄文時代の石器や弥生時代中・後期の土器・石庖丁などが出土しており、周辺に弥生時代の遺跡の存在が予想された。

きつね塚古墳は、山川川右岸にかつて存在した総数60余基からなる多間古墳群に属しているが、今日その大部分が失われている。大塚ヶ平15号墳や深谷1・2号墳などと並び比較的規模の大きなもので、その内容を伝える唯一の古墳であると言ってもよく、極めて貴重なものである。

1987年1月には、1979年の調査をもとに古墳の範囲を確かめるとともに、周辺に弥生時代の遺跡の有無を確認する調査が実施された。<sup>(2)</sup> 調査は古墳の南東側に8つのトレンチを設定して行われた。その結果、きつね塚古墳の外濠が再確認されたほか、弥生時代の溝とピットが検出されている。外濠の規模は前回の調査結果とあわせると直徑60m弱になるようである。

1988年4月には、市営住宅の解体に伴い住宅地内の試掘調査が実施された。その結果、きつね塚古墳の存在する丘陵部分には古墳および古墳の周濠と弥生時代の遺跡の存在が再確認され、狩口台公園南側で中世の遺物包含層が確認された。



第2図 1979年度調査出土遺物実測図（いずれもきつね塚古墳墳丘内出土）

## 2. 山田川流域の弥生遺跡

狩口台遺跡は山田川右岸の丘陵上に立地する。遺跡の多くは、山田川下流の狭小な平野部よりもその左右岸に延びている丘陵上に展開している。

### 大歳山遺跡

1920年代、直良信夫氏の地道な調査研究によって著名となった大歳山遺跡は、山田川下流平野部の奥、東から西に延びた丘陵頂部の平坦面に位置している。遺跡は先土器時代に始まるが、弥生時代においても前期中葉から後期にかけてほぼ連続と集落が営まれている。過去数度にわたる発掘調査により、後期の方形の竪穴住居5棟以上が検出されている。<sup>(註4)</sup>

### 舞子・

### 東石ヶ谷遺跡

中期に入ると、山田川をはさんだ東西の丘陵上に集落が現れ始める。狩口台遺跡は、時期の明らかな竪穴住居は後期のものだけであるが、集落自体は第II様式に営まれ始める。山田川左岸の舞子丘陵上に位置する舞子・東石ヶ谷遺跡は、いわゆる高地性集落のひとつで、第III様式古段階に集落が営まれはじめ、後期後半まで続く。遺構としては、竪穴住居のほか高床式・平地式の掘立柱建物が検出されている。遺物をみると弥生時代の一般的な集落に見られる石庖丁が存在せず、石鏃や投弾などの武器類を専ら所有しており、眺望の良さからも、畿内の玄関口である明石海峡の監視所的な役割を果たしたものと考えられている。<sup>(註5)</sup>



第3図 周辺の弥生遺跡位置図 (1:25000)

後期に入っても狩口台遺跡や大歳山遺跡、舞子・東石ヶ谷遺跡では集落が営まれているほかは、舞子陵や東谷公園などで土器片などが採取されているにすぎない。このうち、大歳山遺跡と東谷公園では銅鐸が発見されている。これら丘陵上の遺跡にとり扱まるように投ヶ上からは扁平鉢式六区製鉄紋の銅鐸が発見されている。<sup>注7)</sup>銅鐸の型式からその年代は中期頃と考えられている。

註1 神戸市立考古館編 「地下にねむる神戸の歴史—発掘現場からの報告—」 1980

註2 兵庫県立防衛工業高等学校郷土史部編 「多聞群集墳発掘調査略報」「かれすすき」 3 1967

註3 宮本卯雄 「孤塚古墳」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989

註4 直良信夫 「福岡明石郡垂水村山田大歳山遺跡の研究」1926

註5 赤松晋介他 「大歳山第一次発掘調査概報」(神戸女子商業高等学校歴史クラブ "Culture" 特別号) 1963

大谷大学考古学研究会編 「'69 大歳山一決着に時効はない!—自主報告書」 1972

神戸市立考古館編 「地下にねむる神戸の歴史—発掘現場からの報告—」 1980

註6 渡辺伸行・若木宏明 「舞子・東石ヶ谷遺跡」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987

丸山 蔚・松林宏典 「舞子・東石ヶ谷遺跡II」 神戸市教育委員会 1990

註7 島田貞彦 「福岡明石郡垂水村発見銅鐸」『考古学雑誌』 19-2 1929

直良信夫・直良勇二 「垂水村新発見の銅鐸とその出土状態」『考古学雑誌』 19-2 1929



第4図 第2地区剥壳風景

## 第2章 調査の概要

### 1. 基本層序

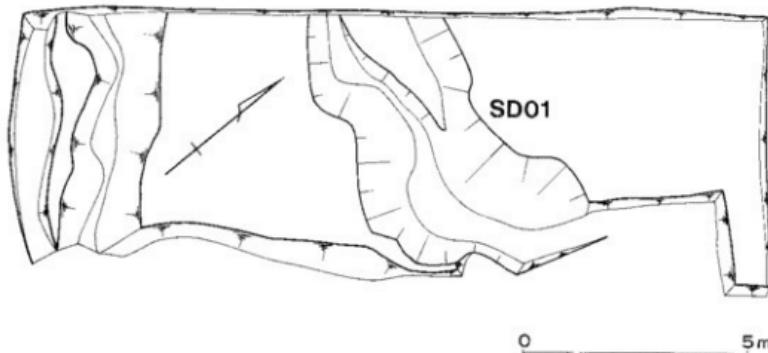
基本層序は、第1地区は表土、灰褐色シルト、淡灰黄色シルト質砂、淡褐色シルト、茶褐色砂礫、明褐色砂礫、黄灰色粘土となっている。

一方、第2地区では表土、暗褐色粘質砂、黄褐色粘土となっている。暗褐色粘質砂層は弥生時代の遺物包含層で、黄褐色粘土層は地山で弥生時代の遺構面となっている。調査区内は旧市営住宅による攪乱を受け、包含層の遺存状態は悪い。また、丘陵頂よりもきつね塚古墳付近へ向かった斜面側の方が遺存状態が悪かった。斜面側には流土も堆積しており、流土中にも土器が含まれている。攪乱は一部地山面にも達しており遺構面はかなり痛んでいる。

### 2. 第1地区

第1地区では淡灰黄色シルト質砂層上面で溝1条を検出している。溝内からは近代の瓦片が出土しており、溝の年代は近代以降のものと考えられる。その下の淡褐色シルト層からは土師質の土器細片が数点出土しているが時期は明確でない。いずれの土器片も磨滅が著しく、流されてきたものと考えられる。

他に遺構は検出されず、最終的に明褐色砂礫を地山面として西側に落ちる谷状の自然地形が検出された。また、地区南側は地山面に至るまで近代の攪乱を受けていることがわかった。



第5図 第1地区遺構平面図

### 3. 第2地区

第2地区は、東西と南北の調査区が期間を隔てて調査が行われているが、本報告ではあわせて1地区とみなし、遺構番号も一連のものとして付することにした。

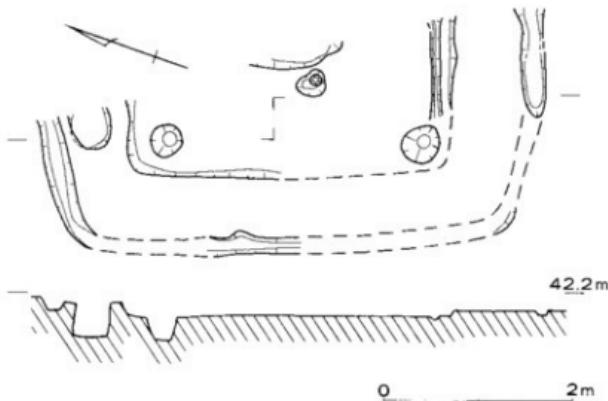
この地区では竪穴住居6棟、土坑13基、溝1条のほかピットなどの遺構が検出された。

**S B O 1** 遺構面が大きく削平されており、周壁溝の存在によって住居と確認できるものである。全体の南半分しか検出していないが、一辺5.0mの方形の竪穴住居であると考えられる。溝の内側には、幅60cmの屋内高床部が確認できる範囲で3方にめぐっており四周するか否か不明である。主柱は4本柱と考えられ、中央土坑を有する。床面南辺と高床部との間に、幅10cm、深さ4cmの溝が確認されている。

**出土土器** 26、27は夔形土器とみられる。いずれも右上がりのタタキ目を施し、底は突出し、外面に指頭圧痕を残す。

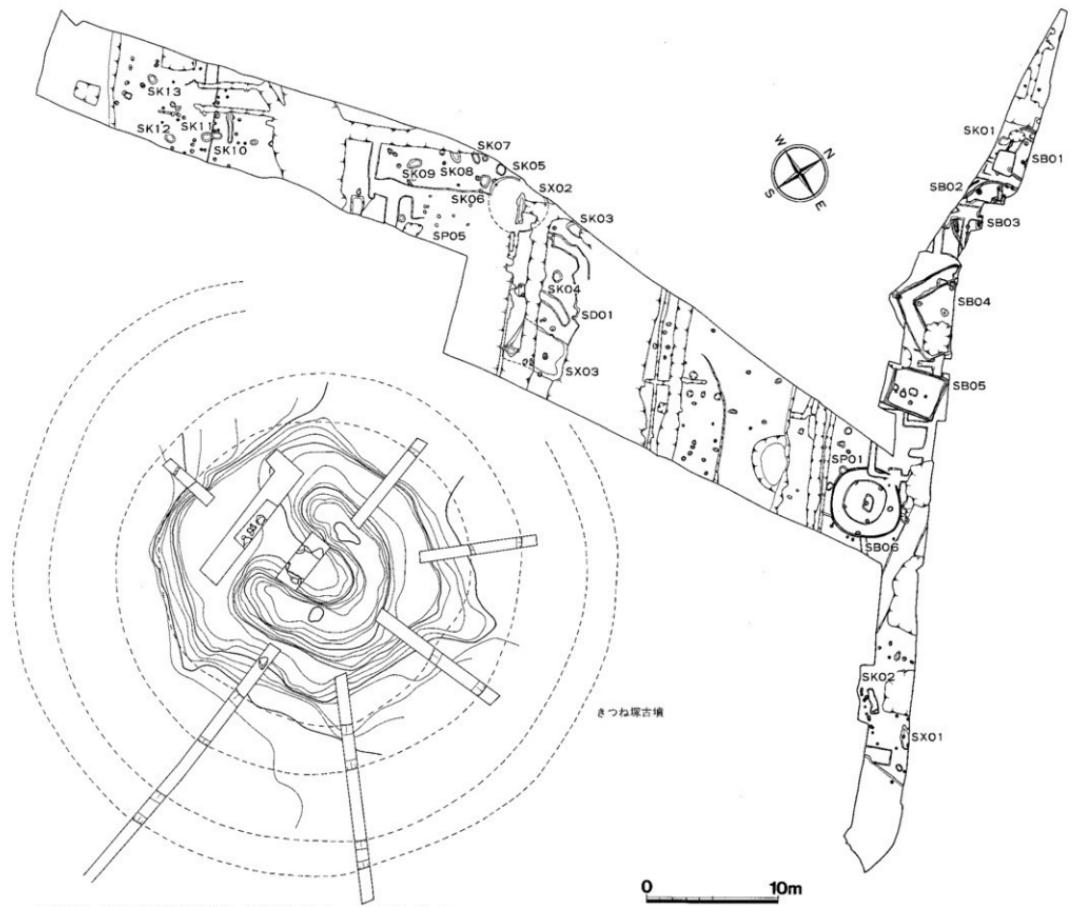
20は壺形土器の底部とみられる。

いずれも第V様式に属すると考えられる。



第6図 S B O 1 平・断面図

**S B O 2** 遺構面が大きく削平されており、周壁溝の存在によって住居と確認できるものである。全体の南半分しか検出していないが、径6.5mないし径7.7mの円形の竪穴住居と推定される。建て替えが行われていると考えられるがそれらの前後関係は明らかでない。主柱と考えられる柱穴は4本検出されており、いずれも深さ70cm前後に達する。しかし、それぞれがいずれの



第7図 第2地区遺構平面図(きつね塚古墳平面図は1979年度調査時作成)

住居址に伴うものか決し難く、主柱の本数も推定し難い。住居内からは、弥生土器片の他にサヌカイトチップが出土している。

#### 出土土器

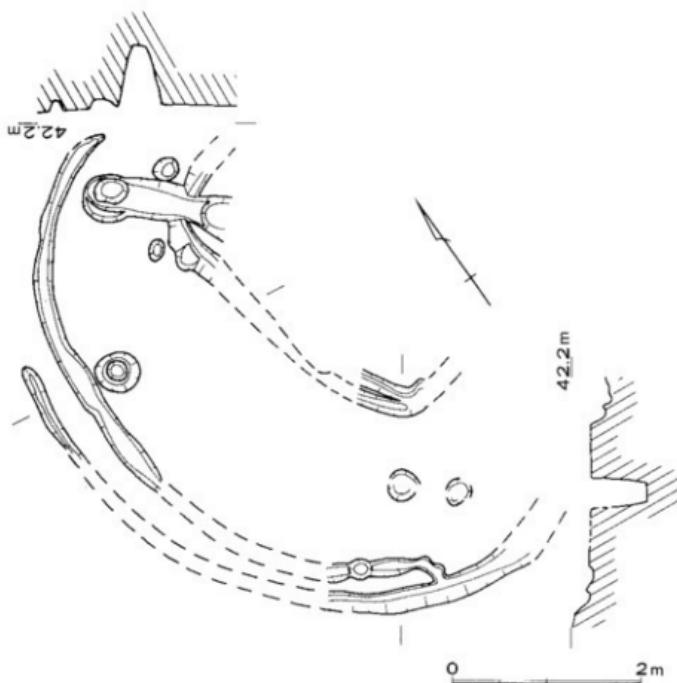
S B 0 3

図化できる出土土器はないが、小片から後期に属すると考えられる。S B 0 2 の中に位置し、遺構面が大きく削平され、周壁溝の存在によって住居と確認できるものである。住居の南西側が検出されているのみで、中央部は擾乱により大きくけずられ、隅部 2ヶ所がわかる程度である。一辺 3.5 m の方形の竪穴住居であると推定される。幅 20cm、深さ 12cm の周壁溝がめぐる。検出部分が狭いため床面構造、主柱等は不明である。

S B 0 3 は、S B 0 2 に屋内高床部を想定した時の床部にあたると考えられるが、円形の中に方形の高床部が存するとは考えにくく、ここでは独立した住居としてとらえた。

#### 出土土器

図化できる出土土器はないが、小片から後期に属すると考えられる。



第 8 図 S B 0 2・0 3 平・断面図

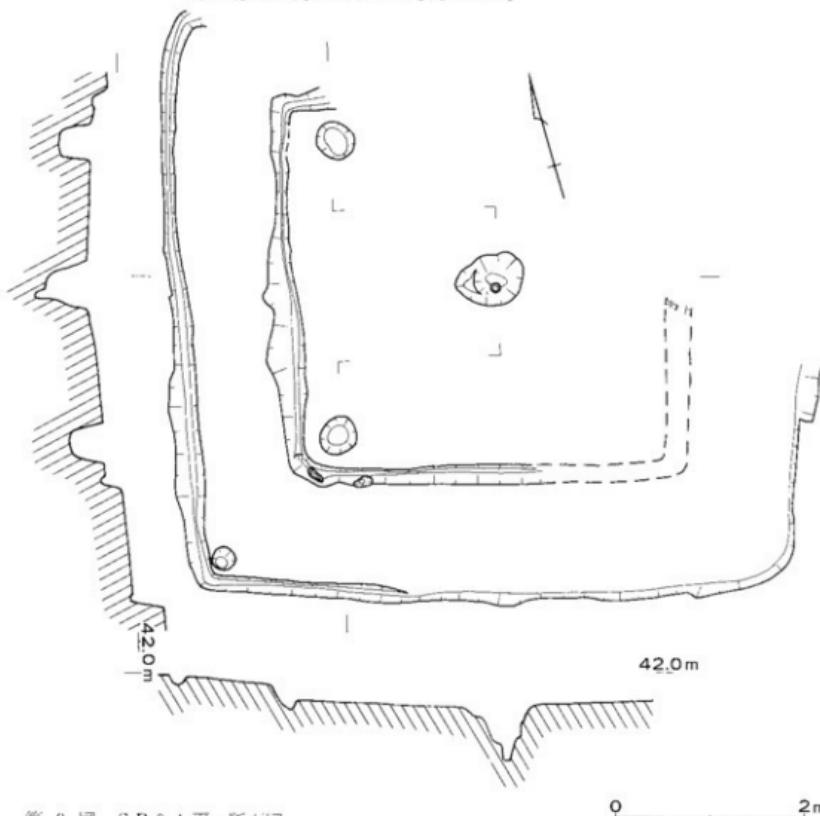
## S B 0 4

全体の約3分の2を検出しており、一辺6.5mの方形の豊穴住居であると推定される。幅約20cm、深さ8cmの周壁溝が西壁と南壁の西側3分の1に確認されている。溝の内側には幅1.0~1.1m、高さ15cmの屋内高床部がめぐり、四周すると考えられる。柱穴は北西隅と南西隅で検出されており4本柱であると考えられる。床面と高床部との間には周溝がめぐっている。床面には、長径80cm、短径55cm、深さ50cmのややいびつな中央上坑があり、なかには炭が含まれていた。その他、周壁溝西隅に径23cm、深さ19cmのピットが存在しているが、他の隅には確認されていない。

## 出土土器

30は、蝶形土器とみられる。平行ないし右上がりのタタキ目を施す。底部は突出し、指頭圧痕を残す。底部内面は簾状のハケ目がみられる。

第V様式に属するものと考えられる。



第9図 S B 0 4 平・断面図

## S B 0 5

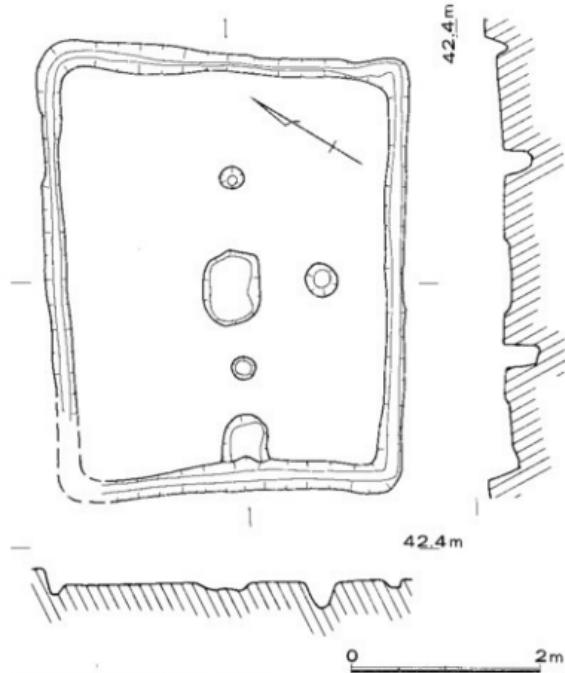
北東-南西の軸に長い4.9m×3.8mの方形の竪穴住居である。幅15~20cm、深さ10cmの周壁溝が四隅する。主柱は長軸上の北東側南西側の2本柱である。中央土坑は、長径80cm、短径60cm、深さ8cmの長軸方向に長い楕円形を呈する。この他、中央土坑の南東側には径38cm、深さ26cmのピットがあり、なかに多くの弥生土器片を含んでいる。南西側の周壁溝中央に接して40cm×45cmで深さ4cmの浅い土坑が存在する。

## 出土土器

1、25、28、29は縦形土器である。1は口縁部である。25は、小型の縦形土器で、外面は右上がりのタタキ目、内面は頸部以下粗いハケ目を施しており、一部ナデ消した部分がある。28、29はいずれも底部で、右上がりのタタキ目を有する。

15は、高杯形土器の杯部である。体部は張って丸みを帯び、口縁は外反する。調整は剥離が著しく分かりにくいが、内外面とも横方向のヘラミガキを施している。

いずれも第V様式に属するものと考えられる。



第10図 S B 0 5 平・断面図

### S B 0 6

径約6mを測る円形の堅穴住居である。幅15cm、深さ18cmの周壁溝の内側には、幅1.2m、高さ18cmの室内高床部が円形に巡る。

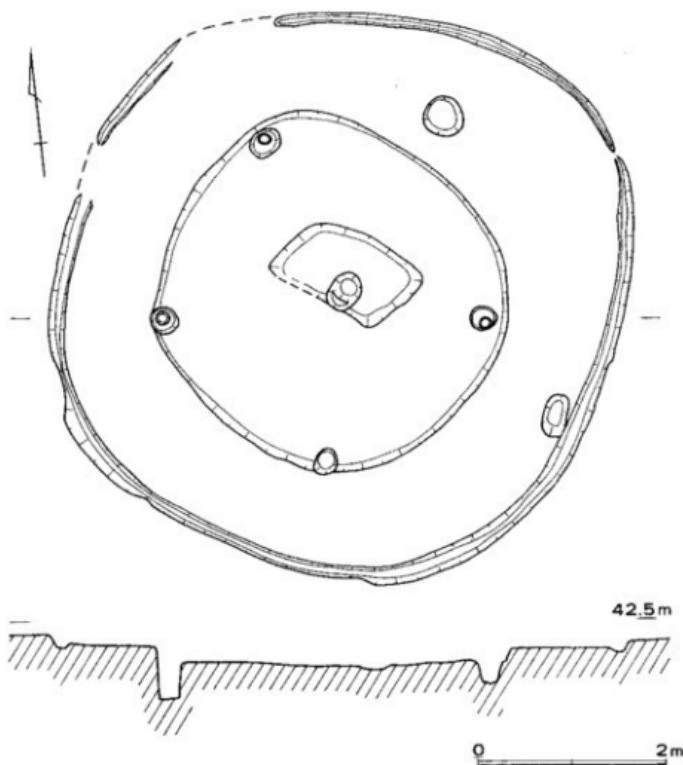
主柱は4本柱で、南西部の辺が他よりも長い。当初、南西の高床部にあるピットが主柱の一つであると考えたが、他の柱穴の深さが26~56cmでありこの柱穴の深さが5cmと極端に浅いため、主柱穴からは除外した。

中央土坑はやや南西寄りで検出された。長辺65cm、短辺42cm、深さ6cmの長方形を呈し、土坑底面には、直径16cm、深さ32cmのピットが確認されている。埋土内から炭が多く出土した。

### 出土土器

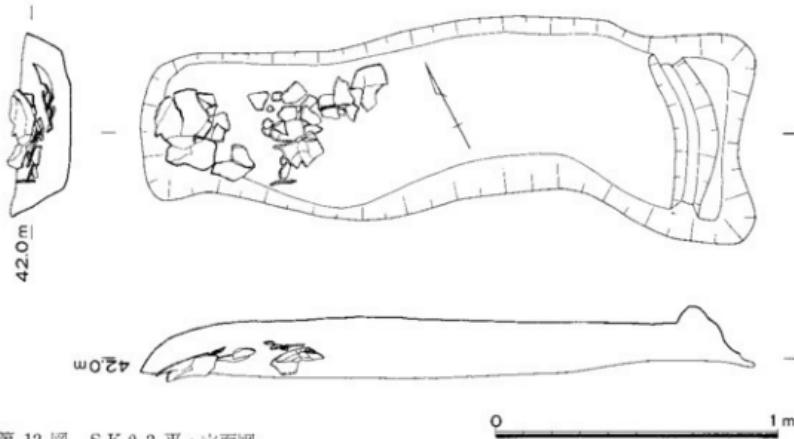
31は中央土坑内のピット、32は高床部から出土した。いずれも裝形土器の底部である。

いずれも第V様式に属するものと考えられる。



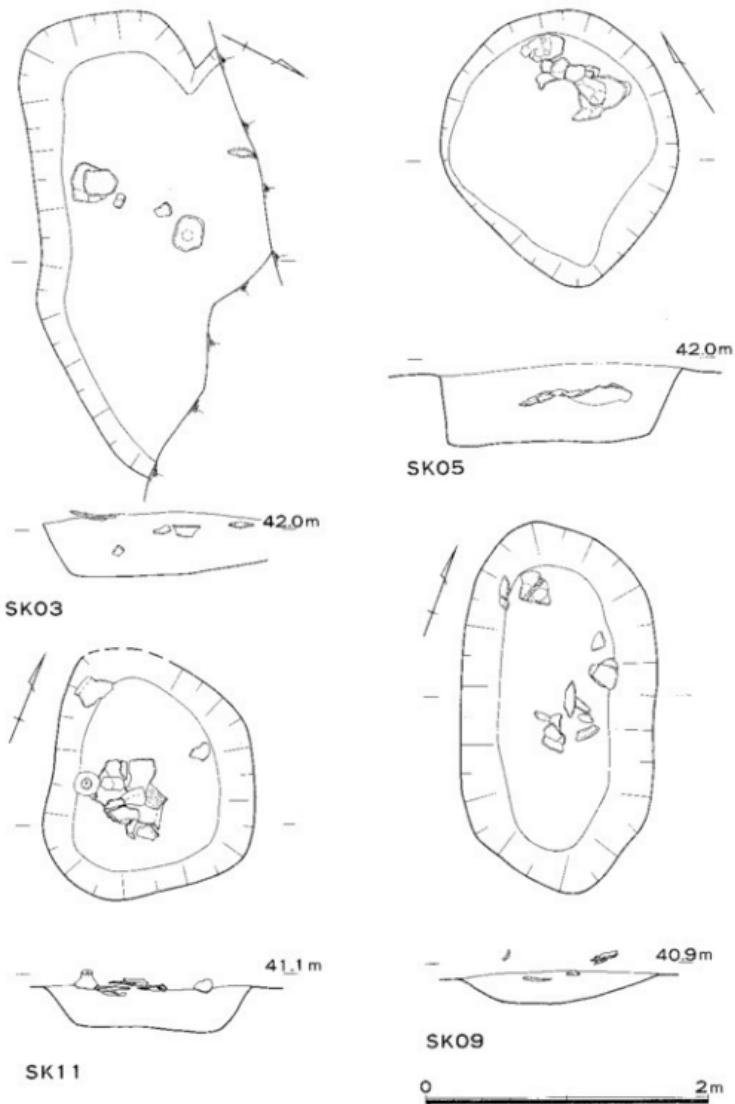
第11図 S B 0 6 平・断面図

- SK 01** 0.8m×0.9mで、深さ0.2mの不整形な土坑である。土坑内からは遺物は出土していない。
- SK 02** 土器の遺存状況などからみてかなり削平を受けているとみられるが、幅0.5~0.75m、深さ0.2mの東西に長い長方形の土坑である。土坑底には東壁に沿って長さ55cm、幅15cm、深さ6cmの溝が存在する。土坑内の中央付近から西壁にかけて土器が集中して出土している。土坑そのものの性格は不明である。
- なお、SK 02の南側に、間隔は不定であるがほぼ一列に並ぶピット列が存在する。その中のいくつかによって棚を構成するとも考えられる。
- 出土土器**
- 3は、菱形土器で、口縁は「く」の字型に外反する。
- 8、14は、壺形土器である。8は、口縁内面に貼付け突帯2条を有する。口縁端部と突帯の中間付近に径約2mmの穿孔が施されている。14は、頸部から胸部上半にかけて横描直線文6帯以上を施し、胸部中位はヨコ方向のヘラミガキ、下半はタテ方向のヘラミガキを施す。内面は底部に指頭圧痕を残すほかは、剥離のため不明である。胎土中に結晶片岩を含んでおり、紀伊の胎土で作られたものと考えられる。
- 18は、甕あるいは壺形土器の底部である。外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。
- このほか図化しえなかったが、紀伊産と考えられる菱形土器の体部が出土している。
- 第II様式後半に属するものと考えられる。



第12図 SK 02 平・立面図

- S K 0 3** 北側と東側が削られているが、残存長で長軸方向1.7m、短軸方向80cm、深さ20cmの不整形の土坑である。土器が埋土の上層から中層にかけて出土した。
- 出土土器** 12は、端部を上方にはややつまみあげ、下方には垂下させて端面を形成し、左下がりの深い刻み目を施している。17は、縫あるいは壺形土器の底部で外面はタテ方向のヘラミガキで内面の調整は剥離のため不明である。中期に属するものと考えられる。
- S K 0 4** 長径1m、短径80cm、深さ10cmの楕円形の土坑である。
- 出土土器** 小片で図化できる土器はないが、中期に属すると考えられる。
- S K 0 5** 長径1m、短径85cm、深さ30cmの楕円形に近い土坑である。埋土の中層から壺形土器が出土した。
- 出土土器** 16は、壺形土器である。外面は胴部にタテ方向のヘラミガキが一部残存しているが、内面の調整は剥離のため不明である。土器焼成以前に底部に穿孔を施す。中期に属すると考えられる。
- S K 0 6** 長辺1.1m、短辺80cm、深さ20cmの隅円方形の土坑である。  
埋土内からは遺物は出土しなかった。
- S K 0 7** 西側は調査区外に出ているが、最大長1m、幅60cm、深さ20cmの楕円形に近い土坑である。出土遺物は細片であり断定はしがたいが、中期のものが出土している。
- S K 0 8** 西側は調査区外に出でおり、最大長1.2m、幅70cm、深さ15cmの楕円形の土坑である。出土遺物が細片のため時期は明確でない。
- S K 0 9** 長辺1.3m、短辺70cm、深さ15cmの楕円形の土坑である。埋土の上層から土器がまとめて出土している。
- 出土土器** 10は壺型土器の口縁部である。垂下させた端面に斜格子文を施す。時期は第III様式に属するものと考えられる。
- S K 1 0** 長径88cm、短径56cm、深さ35cmの不整円形の土坑である。S K 1 1に土坑の一部が削られている。土器の細片が若干出土したのみで時期は不明である。
- S K 1 1** 長径85cm、短径76cm、深さ15cmを測る不整円形の土坑である。S K 10の一部を切って掘削している。
- 出土土器** 土器の大半は埋土上面付近から出土している。2、5、7は壺形土器である。2、5は外面にタテ方向のハケ目を施すが、内面は剥離のため調整不明である。7は内外面の調整は不明であるが、底部に焼成前穿孔が認められる。  
第III様式古段階と考えられる。



第13図 土坑平・立面図

**S K 1 2** 長径94cm、短径65cm、深さ13cmを測る不整円形の土坑である。土器の細片が出土したが時期の詳細は不明である。

**S K 1 3** 長径84cm、短径68cm、深さ12cmを測る不整円形の土坑である。土器の細片が出土したが時期の詳細は不明である。

**S D 0 1** くの字型に曲がる溝状遺構で一部を後世の擾乱で削かれているが、検出長5.5m、幅1m、深さ40cmである。埋土の中、上層から遺物が出土した。

**出土土器** 4、6は壺形土器である。外面にタテ方向のハケ目を施すが、内面は剥離のため調整不明である。

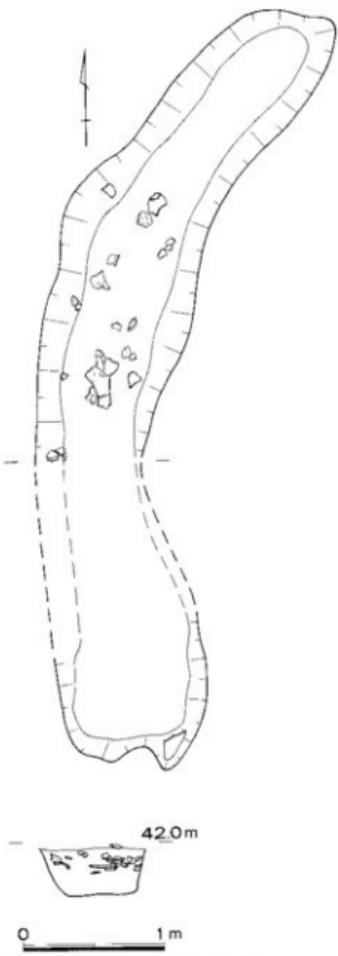
13は壺形土器である。端部は上下に拡張する。端面は中央を突出させるように上下を強くヨコナデし、上端と中央部に刻み目を施す。また、上端部の凹みに円形浮文を貼り付けている。頸部には3条以上の貼り付け突帯巡らし、強くヨコナデしており凹線のように見える。突带上には棒状浮文を貼り付けている。

19は甕あるいは壺形土器の底部である。

以上の土器から、第III様式新段階に属すると考えられる。

**S X 0 1** 2.1m×0.7mで、深さ0.5mの不整形な土坑状の遺構である。中にピット2個が存在する。遺物はまったく出土しておらず、性格は不明である。

**S X 0 2** 後世の擾乱により、大きく削平を受けるが、形態は径5.1mの円形になると推定される。比較的擾



第14図 S D 0 1 平・立面図

乱の少ない西壁部分では、深さ24cmを測る。削平が激しく柱穴等の存在は確認できないが、平面の形状からみて簡単な構造の上屋が存在した可能性もある。

**出土土器**

33、34は壺形土器の底部である。

いずれも第V様式に属するものと考えられる。

**S X 0 3**

大きく擾乱による削平を受けるが、長辺5.6m、短辺3.4mの長方形を呈する。削平の比較的少ない西壁部分では、壁面がほぼ垂直に立ち上がり、深さ20cmを測る。柱穴等は確認されていないが、平面の形状から簡単な構造の上屋が存在した可能性がある。

**出土土器**

11は、壺形土器の口縁部である。口縁端部を下方に拡張し施文帯としている。擬凹線を巡らし、円形浮文を張り付けていた痕跡をのこしている。

22、23、24は、飯蛸壺形土器である。

いずれも第V様式に属するものと考えられる。

**S P 0 1**

東半部分をS B 0 6により削平されているピットである。直径32cm、深さ10cmを測る。

**出土土器**

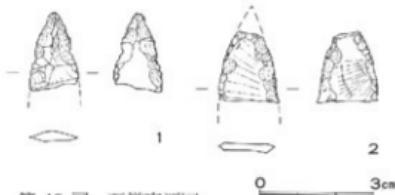
35は壺の底部である。弥生時代中期後半に属すると考えられる。

**石 器**

今回の調査では石鎌が2本出土している。いずれも基部を欠損しているため全体の形態は不明である。

1はS X 0 2、2はS P

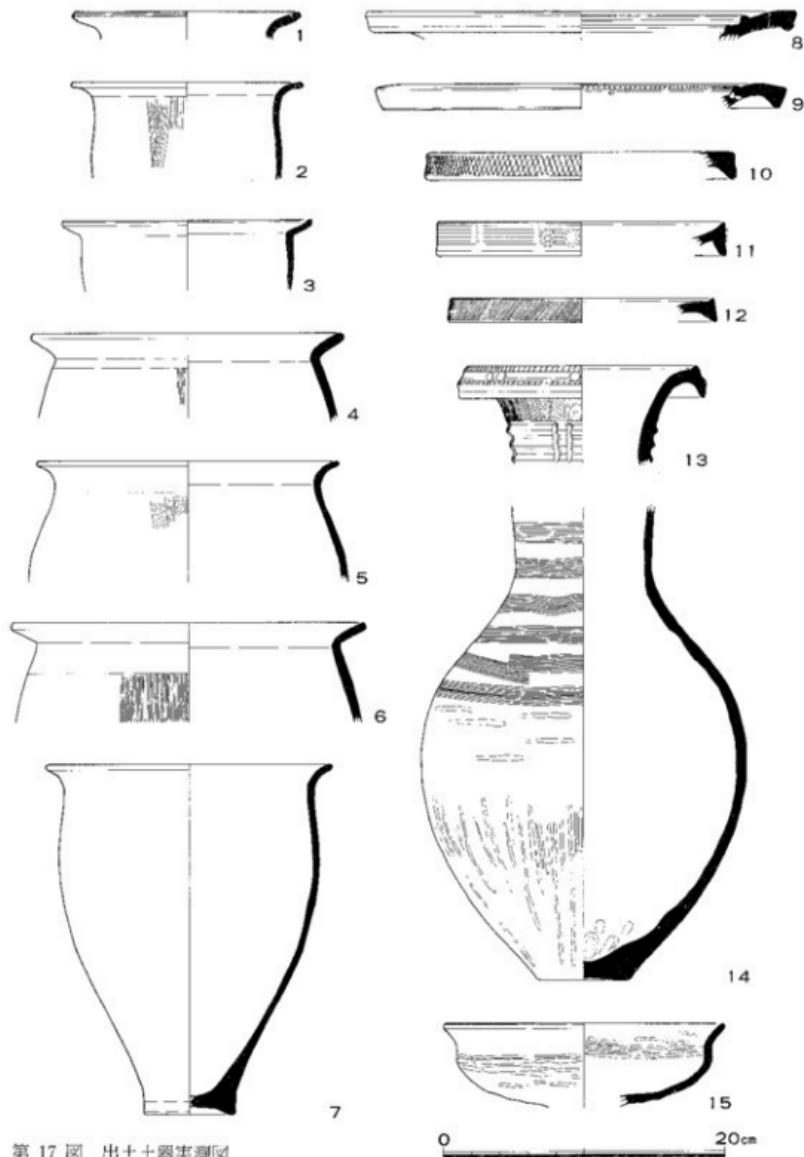
0 7から出土している。



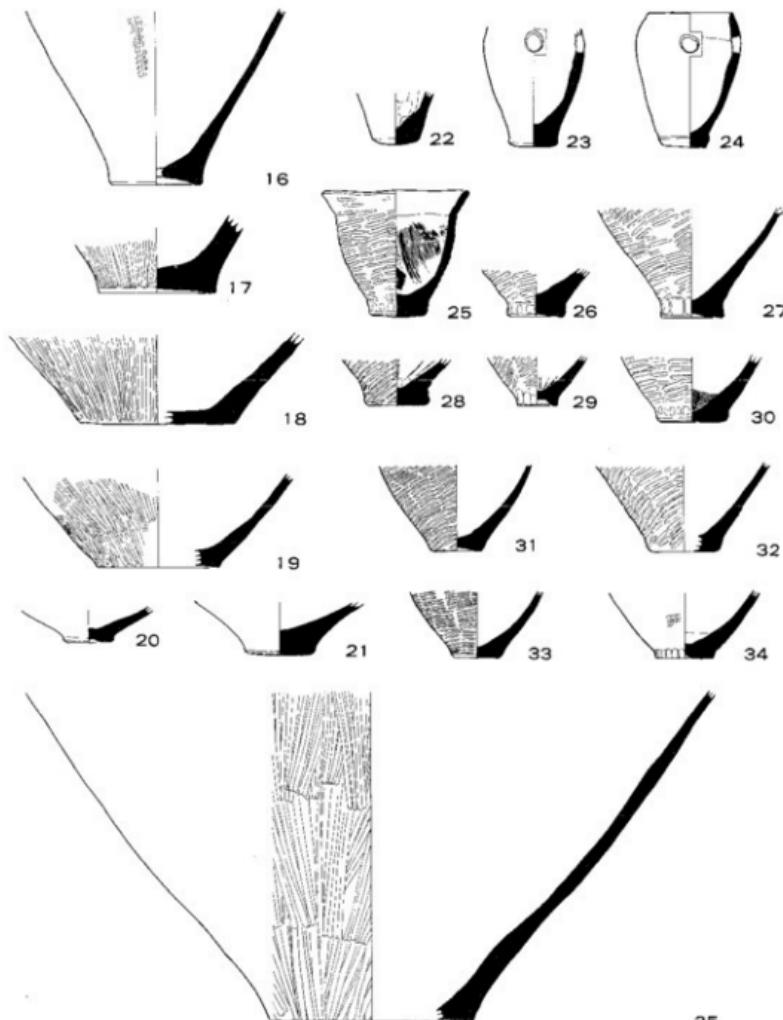
第15図 石鎌実測図



第16図 第2地区ときつね塚古墳



第 17 図 出土土器実測図



1, 15, 25, 28, 29 : SB05  
 2, 6, 13, 19 : SB01  
 30 : SB04  
 31, 32 : SB06  
 9 : SP05  
 3, 8, 14, 18 : SK02  
 12, 17 : SK03  
 16 : SK09  
 5, 7 : SK11  
 4 : SP01  
 33, 34 : SX02  
 11, 22, 23, 24 : SX03  
 35 : SP01

0 20cm

第 18 図 出土土器実測図

### 第3章 まとめ

今回の調査は、道路拡張部分の狭い範囲であったが、これまで知られていなかった弥生時代の集落が明らかとなり、さまざまな資料を得ることができた。ここでは今回得られた資料について若干のまとめを行っておきたい。

第1地区周辺ではかつて縄文時代の石鏡が採取され、試掘調査では中世の遺物包含層を確認している。しかし、今回の調査では近代以降の溝1条が検出された以外は谷状の自然地形が検出されたのみであった。

第2地区では、第II様式から第V様式にかけての遺構が検出された。堅穴住居6棟のほか土坑13基・溝1条・ピット多数などがある。

堅穴住居は、いずれも第V様式に属するもので、地区的北部に集中して検出されている。台地北部に住居が集中して営まれているような状況を呈しているが、きつね塚古墳に向かった緩斜面で検出されているSX02・03については、柱穴などは確認されていないが、住居址である可能性が高い。いずれも第V様式に属するものである。これまでのところ住居址は第V様式に属するものばかりで、中期の遺構は土坑や溝などの検出に留まっているが、生活は中期から後期にかけて連続と営まれていたと考えられる。

狩口台遺跡は、眼下に明石海峡を見下ろす丘陵の突端に位置し、いわゆる高地性集落の様相を呈している。立地からみて、海峡を監視する役割を担ったという見方もできるが、この集落は軍事的機能のみを有するものではなく、山田川下流域に展開する狭小な平野において農耕も営んでいたと考えられる。狭い平野部で少しでも多くの耕作面を獲得するために居住区を丘陵上に置いたのではなかろうか。一般に軍事的機能を有する高地性集落では石庖丁などの農耕具の出土はあまりみられず、石鏡・投弾などの武器類が多数をしめている。今回の調査では出土していないが、きつね塚古墳の調査の際、墳丘盛土中から石庖丁が弥生土器とともに出土している。また、飯蛸壺形土器も何点か出土しており、半農半漁的集落であったのではなかろうか。一方、同じ山田川流域に所在する舞子・東石ヶ谷遺跡は軍事的色彩が濃い遺物を多く出土しており、現在の水田面との比高差も約75mあり、狩口台遺跡とは性格を異にすると考えられる。

狩口台遺跡の集落の全体像はまだ明らかではないが、未調査の部分も多く今後の調査の成果がまたれる。

# 図 版

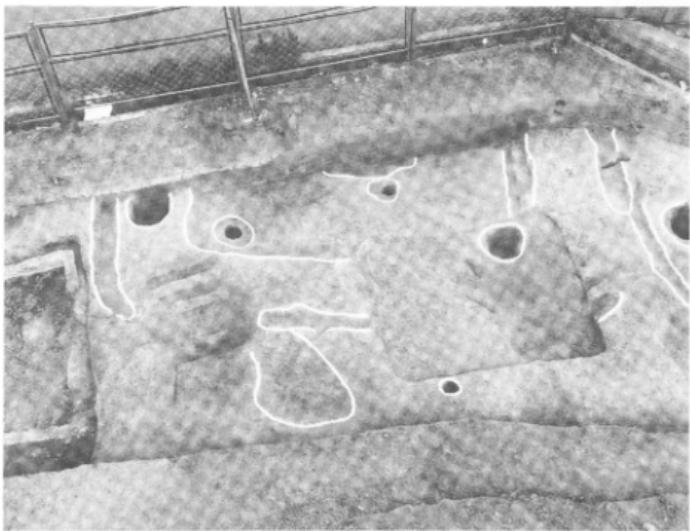


狩口台遺跡から淡路島を臨む（左にみえる森はきつね塚古墳）

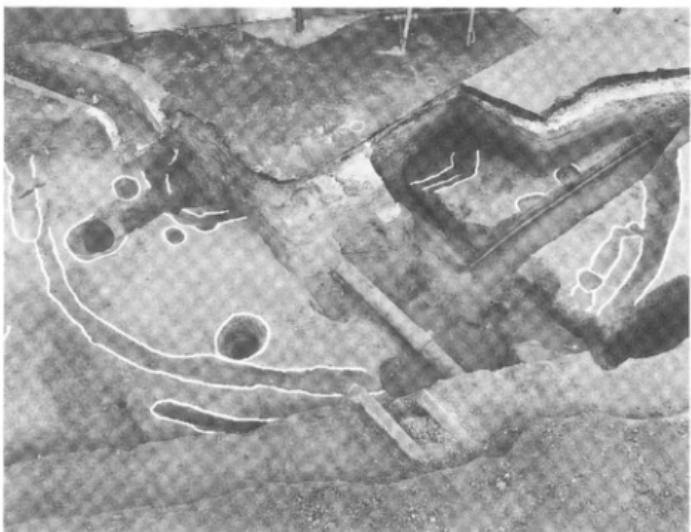
図版 1



第2地区全景

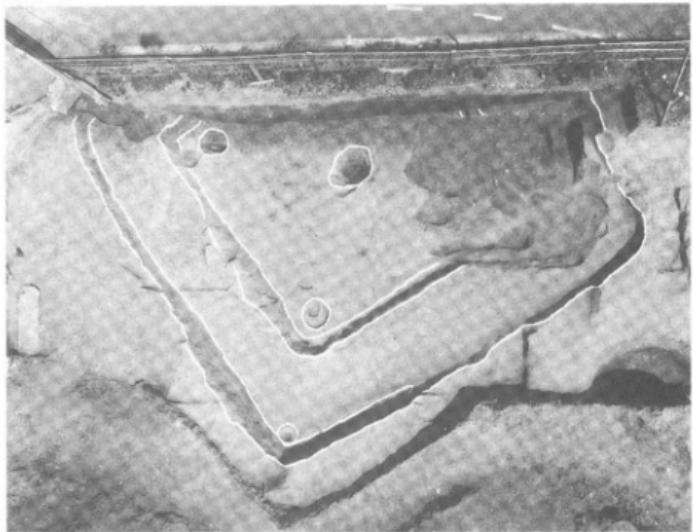


1. SB 01 (西から)

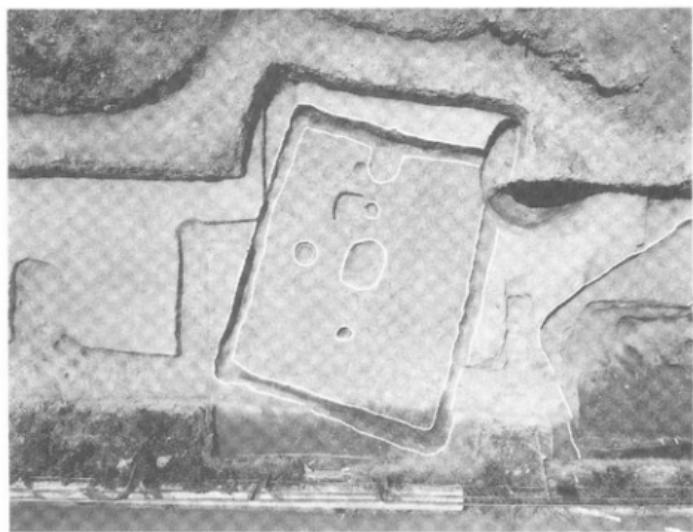


2. SB 02・03 (西から)

図版 3



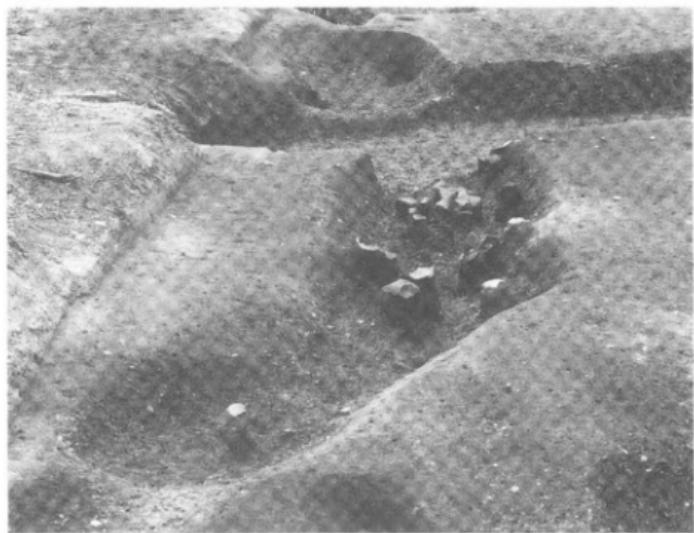
1. SB 04



2. SB 05

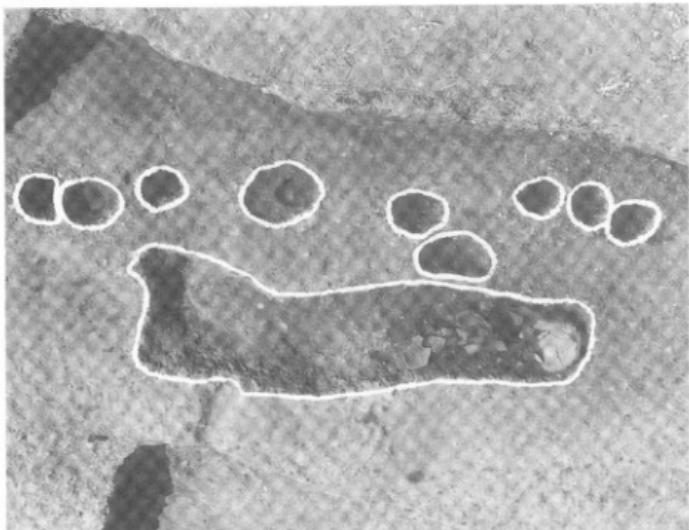


1. SB 06 (南から)

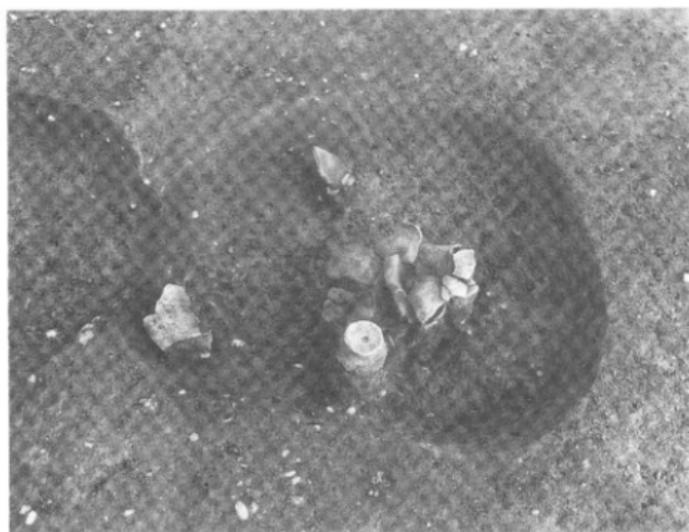


2. SD 01 (北西から)

図版 5



1. SK02 (南から)



2. SK11 (西から)

## 狩口台遺跡発掘調査報告書

---

1990. 3. 31

発行 神戸市教育委員会  
神戸市中央区加納町6丁目5番1号  
印刷(有)アロエ印刷  
神戸市中央区中町2丁目3番8号(香川ビル)  
TEL神戸(078)371-3831

---